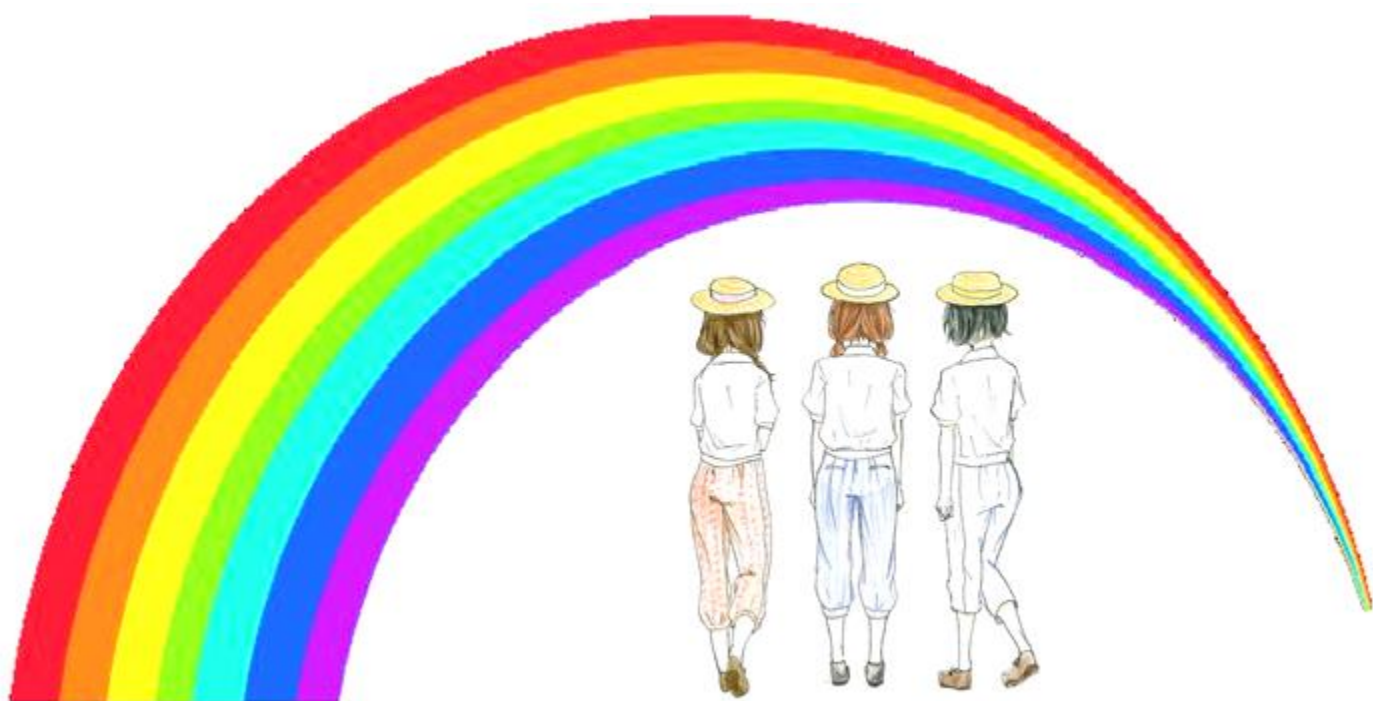


平成29年度 板橋区中学校連合学芸大会参加作品

ぼうきょう  
**望 郷**

— わたしたちの疎開日記 —

(作：上板橋第一中学校演劇部)



太平洋戦争末期、都市部の空襲が激しくなるなか、板橋区の小学生は親元を離れ群馬県で集団生活を送ることになった。修学旅行気分で汽車に乗る子どもたちに待ち受けていたことは……。

**日時** 2017年11月11日(土)

板橋区連合学芸大会2日目

**午後1:00頃上演予定**

(20分前までには会場にお越しください)

**会場**: 板橋区立文化会館小ホール(入場無料)

**上演**: 板橋区立上板橋第一中学校

## 「こんなこと、二度とあってはいけない……」

上板橋第一中学校演劇部は、昨年度は、私たちの地元板橋で起こった「空襲」を題材として、『花火—いたばしの空・昭和20年6月10日—』という脚本をつくり、上演しました。今年度は、「学童疎開」を題材として、群馬県に集団疎開した板橋区の小学校5・6年生の少女たちを主人公とした脚本をつくり、上演します。

なお、今回の脚本をつくるにあたり、次のような日記や手紙、手記などを参考にさせていただきました。

- ・(疎開地に)着いた翌日から父母のもとに帰りたくて泣いた。
- ・絵の具をなめたり、まだ熟していない柿や栗を食べ、腹痛を起こしたり、雪を丸めてトウガラシをかけて食べて空腹をしのいだ。
- ・農家に手伝いに行って、南京袋に入った柿の皮をよく盗んで食べた。見て見ぬふりをしてくれたお婆さんにはありがたかった。
- ・シラミの卵が髪の毛や衣服にびっしりとついて、いくら洗ってもとれなかった。
- ・4月13日、急報がもたらされた。板橋は空襲の惨火に包まれた。4年生のF君の一家が防空壕に入っていて、全員死亡とのことである。F君は孤児になった。あまりの痛ましさすぐに知らせることがためらわれ、日をおいて知らせたのである。
- ・(終戦の報を聞き)子どもたちはとりすがり「東京に帰れるんですか」「お母さんに会えるんですね」「もう空襲はないのですか」と、矢継ぎ早の質問に、あの時私はどう説明したかを覚えておりません。ただ、その夜は、各部屋の電灯の笠から黒い布を取り外し、明るい電灯の下での夕食は「大丈夫だろうか、こんなに明るくて」と心配しながら、なぜかほっとした気持ちでした。
- ・いよいよ十月、待望の疎開地引き揚げの日がやってまいりました。その日は朝から天気が悪く、赤羽駅に着いた時は雨が降っていました。しかし、久々の親子の対面の情景は言葉では表現できないものがありました。みちみち「これからはもうはなれないよ」と子どもに話す親の言葉が耳に入り、胸の奥がジーンとしてきました。

引用：『板橋の平和—戦争と板橋 語りつくす苦難の歴史—』（板橋区立郷土資料館編）

## キャストとスタッフ ※登場人物の名前はすべて架空です。

### ◆群馬県に疎開に行く少女たち

美智子 …… 3年  
香代子 …… 3年  
文子 …… 3年  
恵子 …… 3年  
奈々子 …… 2年  
千代子 …… 2年  
悦子 …… 2年  
祐子 …… 2年  
和子 …… 1年  
久子 …… 1年  
洋子 …… 1年

### ◆板橋区に残る少女

杏子 …… 3年

### ◆地元群馬県の少年・少女

一郎 …… 2年  
早苗 …… 2年  
雪江 …… 1年

### ◆引率の教師

礼子 …… 3年

◆音響・照明 …… 3年  
3年

◆脚本・指導 …… 田中 真則(顧問)